慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	清朝宮廷演劇『混元盒』の成立と上演
Sub Title	The formation and performance of the Qing dynasty court drama "Hun-yuan-he"
Author	山下, 一夫(Yamashita, Kazuo)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2017
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.112, (2017. 6) ,p.37 (210)- 52 (195)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01120001-0037

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

清朝宮廷演劇『混元盒』の成立と上演

山下　一夫

一、はじめに

かつて清王朝の宮廷では、節日に合わせた内容を上演する「節戯」や、何日もかけて長編の物語を上演する「大戯」などの演劇が行われた。清・昭槤『嘯亭続録』巻一「大戯・節戯」に以下のように言う。[1]

乾隆年間の初め、高宗乾隆帝は天下泰平に因み、張照に命じて戯曲を作らせて、宮中の俳優に習わせ、様々な節令に合わせて上演させた。『屈子競渡』『子安題閣』など、節日に応じた典故を全て収めたものを『月令承応』という。…（略）…また、目連尊者が母を救う話を全部で十本にしたものを『勧善金科』といい、年の暮れに上演して鬼を登場させ、古えの追儺の意に代えた。また唐の玄奘が天竺に経典を取りに行く話は『昇平宝筏』といい、上元の前後に上演した。これらの台本はみな張照が自ら作ったものであり、詞藻は華麗で、様々な経典を引用して、すばらしい出来栄えである。後に荘恪親王に命じて蜀漢の『三国志』の物語を作らせたものを『鼎峙春秋』といい、宋の政和年間の梁山の盗賊たちや、宋と金の交戦、徽宗と欽宗の北狩などを作らせたものを『忠義璇図』というが、歌詞は宮廷の御用文人の手にな

り、単に筋を列べ、元明の『水滸記』『義俠記』『西川図』などの戯曲を写しただけで、張照の作品には遠く及ばない。嘉慶十八（一八一三）年、帝は白蓮教匪の事件に鑑みて続き物の上演を廃し、上元の日に『月令承応』を行うだけにするよう命じ、その響きは聞かれなくなるに至った。

節戯と大戯は別個に始まったわけではなく、年末の追儺の節戯で目連の地獄巡りを描く目連戯を上演したために、これと関連のある大部の演目も導入され、それが大戯となった、という関係にある。[2] 上の資料で節戯と大戯を兼ねる演目は『勧善金科』だけだが、同様の性格を持つ演目は実はもう一つある。それが、端午節で上演される『混元盒』である。[3] 筆者は以前これについて論考を発表したが、[4] 近年新たな資料を閲覧する機会に恵まれ、それによって旧稿で示した観点の一部については改める必要が生じた。そこで本稿では以前用いることのできなかった資料に基づき、『混元盒』の様々なテキストの成立の問題について、上演状況との関連から再検討してみたいと思う。[5]

二、『混元盒』とは

『混元盒』の内容については、清・無名氏の『伝奇彙考』巻三に詳細な記述がある。当該演目の記載として重要であるため、やや長くなるが以下に全文を引用する。[6]

清代の作。荒唐無稽な内容で、『封神演義』や『西遊記』などを真似て根拠の無い話を作り上げ、一時の娯楽に供したものである。内容は以下の通りである。明の嘉靖年間、世宗嘉靖帝は不老不死の術を好んだ。民間の皮職人だった陶謙が、妖言を流した罪で捕らえられたところ、石を金に変える術を持つと聞いて引見した世宗嘉靖帝が、陶謙の話を盲信して童男童女を焼き殺し、錬成した丹薬を服用したため、人々の怨嗟の声は天に達した。怒った玉帝は凶神を遣わして罰を下し、この悪人を捉えようとした。大孤山に金花聖母娘娘という水神がおり、張真人とは代々仇同士だったが、この機に乗じて妖道を興そうとし、「聚妖幡」を用いて妖怪たちを集めた。中でも優れていた者は白氏夫人・紅衣道人・洪氏夫人・呉公長者・白衣娘子・黄衣娘子・蛙子妹妹・独角大王・蓽石精・黒石精・蝎子精・大毛・二毛・狐仙・七怪

である。娘娘はこの者たちに法術を授けて言った。「洪教の張節真人は先祖代々の仇だが、先祖伝来の九宮八卦五雷神印という、世に類い稀なる法宝を持っている。お前たちはまずわが法術で神印を破り、やつが出てきたところで殺すように。」命を受けた妖怪たちは各地に散り、人々の間に隠れて害をなしつつ、張真人を待ち受けた。これを知った張真人の祖である張道陵が陞仙台に降り、太乙図・九竜神帕・琢妖金簪・信香盒・如意金盒を張節に授けた。信香盒とは急時に盒の中で香を焚くと張道陵が現れるというもので、また如意金盒とは「混元盒」と呼ばれる、妖怪を調伏し閉じ込めることができる法宝である。さてその頃、将軍の一族に趙国盛という者がおり、父祖の功績によって国子監に入学した。奎星閣に妖怪が出るという噂を聞き、成敗しようと剣を携え中で待ち伏せしていると、はたして夜中に美しい女が現れた。妖怪と知った趙国盛が酒を飲ませると、女は酔って口から玉のようなものを吐き出した。趙国盛が飲みこむと、五臓が燃えるように熱くなり、その後身体が飛ぶように軽くなった。妖怪は酔いから醒めると激怒し、「必ずお前に復讐する」と言った。その後趙国盛は科挙に合格し、御史に抜擢されて江西に赴任したが、御史の印をなくしたため、病にかこつけて政務を休んでいた。そこに奇病を治すことができるという二人の道者が現れ、趙国盛が御史の印をなくしたことを知って、長江の中から印を探し出してきた。趙国盛が褒美を取らせようとしたが受け取らず、かわりに紙を一枚取り出し、そこに張真人の神印を押すように言ってきた。そこで趙国盛が張真人に頼みに行くと、張真人は火徳星君を召喚し、真火で紙を焼きはらった。すると紙は女の姿に変わり、「私はもともと良家の娘でしたが、二匹の妖怪に攫われ、皮を剝がれて紙にされました。どうか私の仇を取ってください」と言う。そこで張真人が法術で調伏すると、妖怪は華花石と黒花石で、また仲間の独角大王も捉えたが、これは白脛大虎だった。恥じ入った趙国盛は逆恨みをして張真人を朝廷に誣告したため、世宗嘉靖帝は廷臣の陸炳と薛保を遣わして張真人を都に召還した。その頃、洪氏夫人が美しい女に化けて村民の富氏の子を騙し、竜を桶の中に閉じ込めて長江一帯の住民を溺れさせ、張真人に危害を加えようとしていた。張真人が逆に富氏の子を用いて調伏すると、洪氏夫人の正体は大白蟒蛇であった。さらに呉公長老たちが張真人に襲い掛かったが、趙国盛が鞭を使って縛り上げ、張真人が混元盒の中に閉じ込めた。そこで紅衣道人・

白衣夫人・黄衣娘子の三匹の妖怪が金花娘娘に訴え出たため、金花娘娘自ら出陣して張真人と戦った。神将たちは誰も金花娘娘に敵わず、張真人も法宝をすべて金花娘娘に奪われて捕らえられたが、張真人は水官星君の化身だったため、金花娘娘も手を出せず、水府に閉じ込めた。張道陵の上奏により、玉帝は天王たちに命じて十万の天兵とともに討伐に向かわせたが、金花娘娘が自らの居所を「寒光冷気」で覆ったため、天王たちは中に入れず、仕方なく西方闘戦勝仏孫大聖と二郎神を呼び、神通力で破ってもらった。敗走した金花娘娘は師の老母元君に出陣を請うたが、孫大聖も老母元君には手が出せない。怒った玉帝が仙籍を調べると、老母元君は女媧の弟子と分かったので、女媧から老母元君と金花娘娘を叱責させ、三匹の妖怪も主人のもとに帰らせた。三匹の妖怪は、普門の白鸚鵡と、南極山中の猴精と、南極老人の乗る鹿だった。水府から脱出した張真人は張家湾に行き、そこで白氏夫人を混元盒の中に閉じ込めた。白氏夫人は千年の老狐で、強大な神通力の持ち主だったため、張真人は四依山の散仙陸圧道人の助力で調伏した。張真人はほかにも多くの妖怪を倒しながら旅を続けたが、崇文門に到着すると火徳星君に出会った。火徳星君が勅命を奉じて張志の家を燃やそうとしていることを知った張真人は、ひそかに張志にこれを伝えたため、天の機密を漏らした罪で後に自らの居所を焼かれてしまった。朝廷に入った張真人の弁明によって冤罪だと知った世宗嘉靖帝は、趙国盛を断罪するが、趙国盛は処刑間際に脱走し、そのまま行方知れずとなった。その頃、蝎子精が人々に害をなしていたため、世宗嘉靖帝は陶謙に命じて調伏させようとしたが、陶謙は恐れて逃げ出し、路上で死亡した。張真人は廷臣たちの推薦で蝎子精を調伏し、世宗嘉靖帝の賞賛を受けた。張真人は、妖気が盛んになったのは陶謙の妖術が天帝の怒りに触れたためだと告げ、世宗嘉靖帝に正法を崇め妖説を信じないよう説いた。つとに混元盒のことを聞いていた世宗嘉靖帝が盒を開けて中を見せるよう命じたため、張真人は閉じ込められていた妖怪を一つ一つ取り出して見せ、再び盒の中に収めた。そして辞去して竜虎山に戻り、羅天大醮を行って天神たちに酬いた。その後、張真人は玉帝によって水府星君に任命され、沐浴後昇天していった。

作中登場する「西方闘戦勝仏孫大聖」は天竺への旅を終えて神となった孫悟空のことで、二郎神が金花娘娘の調伏に赴

く場面も『西遊記』の設定を借用している。また散仙陸圧道人は『封神演義』に登場する神仙で、人間が成道した神仙と、動物や鉱物に由来する妖怪との抗争という枠組も『封神演義』からの流用である。後述する『混元盒』の別名『闡道除邪』の「闡道」も、『封神演義』の「闡教」という表現を意識したものと思われ、また嘉靖年間を舞台としているのも『封神演義』が嘉靖帝の道教政策を意識して書かれたことを受けている。[7]

張道陵は漢末の五斗米道、後の天師道の鼻祖で、道教の実質的な開祖である。元・趙道一『歴世真仙体道通鑑』巻十八には張道陵が「五方八部鬼帥」を調伏した話が記されているが、[8]これは張道陵の代表的な故事として他の様々な文献にも登場するだけでなく、[9]張道陵を宋の包拯に置き換えた明・安遇時『百家公案』第五十八回「決戮五鼠鬧東京」や、鍾馗に置き換えた明・無名氏『慶豊年五鬼鬧鍾馗』雑劇などの「変種」も存在する。[10]

天師道の領袖は張道陵の子孫が代々務めるが、これが作中に登場する張真人で、一般には張天師と称される。[11]ただ嘉靖年間の張天師は張節という名ではなく、[12]こうした点は『伝奇彙考』が本作を「根拠の無い話」としている理由の一つであろう。また金花娘娘の配下のうち、洪氏夫人・呉公長者・蝎子精はそれぞれ蛇・蜈蚣・蝎の妖怪だが、これは人々に病毒をもたらす存在として端午節で辟邪の対象とされた「五毒」である。[13]明・劉若愚の『酌中志』巻二十に以下のように言う。[14]

五月。初一日から十三日まで、皇后妃嬪や内臣たちは、五毒やヨモギで作った虎の飾りの縫い取りをした礼服を着て、門の両側には菖蒲やヨモギの鉢を置き、門の上には屏風を吊し、その上に天師や仙子仙女が剣を執って五毒を降す物語を描き、新年の門神に類似したことを行う。一ヶ月吊してから片づける。

上記資料から、「張道陵が五毒を降す物語」が少なくとも明代には成立しており、端午節にその図像が魔除けとして飾られたことが分かる。[15]これに張道陵の「五方鬼主」の逸話が被さったのが、明末清初あるいは清の道光年間頃の成立とされる小説『混元盒五毒全伝』全二十回である。[16]これは、明の永楽年間の蘇北を舞台に、張俊天師と狐精の金奶奶が対立しながらもそれぞれ五毒を倒すというもので、陶謙・趙国盛・孫大聖・二郎神などは登場せず、また張天師と金花娘娘が戦う設定ともなっていない。この話が後に『封神演義』や『西遊記』の影響を受けることで、宮廷演劇『混元盒』の物語が成立したも

のと思われる。

清・姚燮の『今楽考証』の「国朝雑劇」には、裘蔗村の作品の中に「『混天合』」の文字が見え、荘一拂はこれを『混元盒』の誤記とする。[17] 裘蔗村とは裘璉のことで、浙江慈渓の人、崇禎十七（一六四四）年に生まれ、康熙二十六（一六八七）年に『大清一統志』の編纂に参加し、雍正七（一七二九）年に没した人物である。版本が残っていないこともあり、この裘璉が本当に伝奇『混元盒』を書いたかどうかは判断できないが、一方で成立の下限が乾隆二十五（一七六〇）年となる『紅楼夢』第五十四回で伝奇『混元盒』が言及されており、後述するように宮廷演劇『混元盒』の初演は嘉慶七（一八〇二）年なので、それ以前に確かに伝奇『混元盒』が存在し、宮廷演劇もおそらくそれを元に作られたものと思われる。

さて、冒頭の引用で言及されていた張照の宮廷演劇『月令承応』には「端午承応」として以下の節戯が収録されている。[18]

『奉勅除妖』『祛邪応節』、張道陵天師が法力の弱い老道士を助け、女に化けた五毒を退治する。

『霊符済世』、神仙の呂洞賓が端午の護符を売る偽道士を打ち負かし、さらに五毒を退治する。

『正則成仙』『漁家言楽』、屈原の霊が現れ、自分は仙人になったのでもはや弔ってもらう必要は無い、と述べる。

『奉勅除妖』『祛邪応節』『霊符済世』にはいずれも五毒退治の場面があり、特に前二者は張道陵が登場し、『混元盒』と同じモチーフを扱っている。しかしいずれも妙におどけた内容になっており、それは屈原が登場する『正則成仙』『漁家言楽』も同様である。また同じ『月令承応』の「中元承応」にある『仏旨度魔』『魔王答旨』は、目連が悉達太子の命で地獄まで調達（デーヴァダッタ？）を救いに行くという話で、明らかに目連の地獄巡りの物語（あるいは『勧善金科』）のパロディである。このように、『月令承応』に収録されている節戯はいずれも遊戯的性格が強く、『奉勅除妖』『祛邪応節』も『酌中志』で言及されている「張天師が五毒を降す物語」（さらに言えば伝奇『混元盒』）を知りながら、意図的にこれと異なる話を展開したものといえる。[19]

三、テキスト

（一）八十五齣本

「嘉慶七年旨意檔」には、以下のように宮廷演劇『混元盒』の制作、および初演時の状況が記されている。[20]

四月二十一日。陛下から『混元盒』一本から三本が下賜され、内頭学と内二学に上演用の台本を書かせ、陛下が配役を考えた。五月五日。蓮慶と来喜が「『混元盒』を鼓板の伴奏から始めて銅鑼と太鼓が続くのは誤りである」と報告した。蓮慶と来喜は（鼓板を担当する）高吉順に自ら三十叩きの罰を与え、以後二度とかれを招かないことにした。五月九日。陛下が『混元盒』の配役を決定した。第一齣、玉皇は董玉と大劉進喜、金星は王麟祥と任玉、金花は彭禄寿と曹進喜。第二齣、天師は張良貴と黒子。第三齣、呂洞賓は孫魁と魏得禄、陶謙は大劉得と黄元。第四齣・第五齣、陸炳は陸順。第六齣、嘉靖は李増寿と小劉進喜。

北京の首都図書館に所蔵される『混元盒』三巻八十五齣抄本は、上の第一齣から第六齣までの登場人物が一致しており、この嘉慶七（一八〇二）年の初演時の面影を伝えるテキストだと思われる。他の大戯と同様、齣ごとに崑曲と弋陽腔系の曲を交互に用いる「崑弋腔」で、『伝奇彙考』に記される内容も全て含んでいる。全体の構成は以下の通り。

巻一　第一齣　家門／第二齣　張捷得孫／第三齣　房山遇道／第四齣　国勝行路／第五齣　陶謙遭騙／第六齣　張李首告／第七齣　金殿試術／第八齣　星官奏事／第九齣　金花聚妖／第十齣　巡天逢怪／第十一齣　道陵賜宝／第十二齣　凌霄哀赦／第十三齣　呑丹／第十四齣　嗟嘆／第十五齣　設計／第十六齣　二妖攝韓／第十七齣　得信／第十八齣　韓氏全節／第十九齣　韓氏託夢／第二十齣　従文主試／第二十一齣　為国薦賢／第二十二齣　公廨失印／第二十三齣　二妖献印／第二十四齣　求印／第二十五齣　修本／第二十六齣　誣奏／第二十七齣　詔取

巻二　第一齣　家宴／第二齣　求配／第三齣　花燭／第四齣　問探／第五齣　驚使／第六齣　起程／第七齣　投庵／第八齣　染病／第九齣　鬧廟／第十齣　書斎詳扇／第十一齣　夫妻嘆子／第十二齣　邪法阻舡／第十三齣　法官破宝／第十四齣　賜針／第十五齣　金針刺蟒／第十六齣　詰問子情／第十七齣　維厚帰郷／第十八齣　矛精強配／第十九齣　香閨遭変／第二十齣　請術鎮魔／第二十一齣　求画／第二十二齣　降妖／第二十三齣　失画

被責／第二十四齣白狐附体／第二十五齣　神壇収矛／第二十六齣　法官送符／第二十七齣　鳴冤除妖／第二十八齣　分身拒法／第二十九齣　白狐求救／第三十齣　悟空奉牒／第三十一齣　薛劉結親／第三十二齣　金花帰命／

巻三　第一齣　国勝訪友／第二齣　水中呑寿／第三齣　三妖会盟／第四齣　投井入竅／第五齣　長寿擺索／第六齣　厨後開店／第七齣　闖道追踪／第八齣　法官縛怪／第九齣　後堂勘問／第十齣　姐弟議盗／第十一齣　回家報信／第十二齣　請神服妖／第十三齣　盗屍／第十四齣　奉詔入都／第十五齣　陳情／第十六齣　会審／第十七齣　法場／第十八齣　点化帰山／第十九齣　下凡／第二十齣　洩機／第二十一齣　赦誅／第二十二齣　焚火寓／第二十三齣　救難／第二十四齣　静掃／第二十五齣　験毒／第二十六齣　恩栄

なお宮廷演劇は、光緒年間（一八七五―一九〇八）になると崑曲や弋陽腔系に代わって新興の京劇（皮黄）に移行する。『清蒙古車王府蔵曲本』所収『混元盒』（頭本至八本）および『闡道除邪』（九本至十六本）は、[21]歌詞は皮黄に改められているが、冒頭部分で玉帝が登場した後、「道陵賜宝」「陶謙出世」の場面が続くなど、内容的に「嘉慶七年旨意檔」や首都図書館本と近く、三巻八十五齣本をもとに京劇に改編されたテキストだと思われる。そしてこれに相当するのが「光緒十年恩賞日記檔」に上演記録がある『混元盒』『闡道除邪』であろう。[22]

五月初一日…（中略）…二出頭本『混元盒』、四出二本『混元盒』、六出三本『混元盒』、八出四本『混元盒』。初五日…（中略）…二出二本『闡道除邪』、末出二本『闡道除邪』。

また、北方の歌い物芸能の一種である鼓詞に中央研究院歴史語言研究所蔵『五毒伝』がある。孫楷第は『中国通俗小説書目』でこれを小説『混元盒五毒全伝』の藍本としているが、[23]内容が宮廷演劇『混元盒』、特に首都図書館本とよく似ているので、この点は孫楷第の誤認であろう。歌い物芸能は演劇の廉価版として機能した側面があり、[24]この鼓詞も宮廷での上演を見ることのできない層や、手軽に宮廷演劇の内容を再現したい層のため行われたものと推測される。

（二）三十二齣本

崑弋腔の宮廷演劇『混元盒』は他に四本三十二齣本がある。[25]冒頭の玉帝の場面は無く「金花聚妖」から始まり、陶謙も

最後に唐突に出てくるだけで、全体的にかなり簡略化された内容になっている。

第一本 第一齣　金花聚妖／第二齣　道陵賜宝／第三齣　被攝痛妻／第四齣 五夜呑丹／第五齣 全節剖腹／第六齣 起程失篆／第七齣 二妖献印／第八齣 謁師弁明

第二本／第九齣 思春獲偶／第十齣 漁戸憂児／第十一齣 攝水阻舟／第十二齣 尋蹤露機／第十三齣 遭冤泣訴／第十四齣 金針刺蟒／第十五齣 劉府開宴／第十六齣 大悲救難

第三本／第十七齣 漁色逢妖／第十八齣 猜詩遭魅／第十九齣 痴子隠情／第二十齣 霊判驅邪／第二十一齣 狂狐作祟／第二十二齣 蠍虎呑児／第二十三齣 瘋魔控訴／第二十四齣 施威被擒

第四本／第二十五齣 結義聯盟／第二十六齣 投井幻形／第二十七齣 献技得信／第二十八齣 鎖拿哭屍／第二十九齣 議盜同心／第三十齣 預召諸神／第三十一齣 盗屍妖遁／第三十二齣 三教伏魔

東京大学東洋文化研究所双紅堂文庫に所蔵される以下の清内府抄本崑弋腔『闡道除邪』残本は、上記の四本三十二齣と齣題が一致しており、これと同系統のテキストだと思われる。

頭本　五齣　全節剖腹／六齣　起程失篆／七齣　二妖献印／八齣　謁師生釁

中央研究院歴史語言研究所所蔵崑弋腔『闡道除邪』残本も四本三十二齣本と齣題が一致するが、構成から考えて二本三十二齣になるようである。「本」は上演日数なので、初めは四日間の上演を想定して作られたが、後に二日間に変えられたのだろう。

頭本二齣　道陵賜寶／二本四齣　狂狐作祟／二本六齣　瘋魔控訴／二本七齣　施威被擒

崑弋腔『闡道除邪頭本題綱』昇平署抄本も、構成からしてやはり二本三十二齣である。[26]

頭本　第一齣 金花聚妖／第二齣 陳生自嘆／第三齣 月下被韓／第四齣 午夜呑丹／第五齣 全節剖腹／第六齣 起程失篆／第七齣 二妖献印／第八齣 謁師生釁／第九齣 拘魂弁明／第十齣 蟒怪思春／第十一齣 漁戸獲偶／第十二齣 漁戸憂児／第十三齣 攝水阻舟／第十四齣 遭冤泣訴／第十五齣 金針刺蟒／第十六齣 大悲救難

「道光三年恩賞日記檔」「道光四年恩賞日記檔」「道光二十二年恩賞日記檔」に載せる『闡道除邪』は、この二本三十二齣本の上演の記録だと思われる。[27]

『闡道除邪』頭本　一　金花聚妖／二　陳生自嘆／三　月下摂韓／四　五夜呑舟／五　全節剖腹／六　起程失篆／七　二妖献印／八　謁師生釁／九　拘魂弁明／十　蟒怪思春／十一　漁郎獲偶／十二　漁戸憂児／十三　摂水阻舟／十四　遭冤泣訴／十五　金針刺蟒／十六　大悲救難

『闡道除邪』二本　一　漁色逢妖／二　狂狐作祟／三　霊判閑邪／四　攔街控訴／五　白氏施威／六　金花奮勇／七　彭沢闘法／八　蝎虎呑児／九　投井幻形／十　献技投充／十一　端陽聞信／十二　妖犯鎖拿／十三　哭屍霜目／十四　議盗同心／十五　諸神預召／十六　四怪全除

なお北京西派皮影戯（影絵人形劇）の台本に『混元盆』がある。[28]八十五齣本にしかない「琵琶縁」の場面も含まれているが、「金花聚妖」から始まり「三教伏魔」で終わっているので、基本的には三十二齣本の影響下に成立したと思われる。王府での上演を中心に活動した北京西派は、『混元盆』以外にも『勧善金科』に近い『忠孝節義』や、『昇平宝筏』に近い『西遊記』、また『英列春秋』や『香蓮帕』など、宮廷大戯と共通した演目を有しており、王府で鼓詞と同じく大戯の「廉価版」を行っていたものと思われる。

また皮黄『頭本闡道除邪第一齣至第九齣』および皮黄『闡道除邪第十齣至第十四齣』昇平署抄本は、構成から見て全体で四本三十二齣となり、「金花聚妖」から始まる上、車王府曲本所収本とは大きく字句が異なるため、これとは別に崑弋腔の三十二齣本から新たに京劇に改編されたテキストだと思われる。[29]

頭本　第一齣　金花聚妖／第二齣　道陵賜宝／第三齣　被攝痛妻／第四齣　午夜呑丹／第五齣　全節剖腹／第六齣　起程失籙／第七齣　二妖献印／第八齣　謁師生釁／第九齣　拘魂弁明

二本　第十齣　思春獲偶／第十一齣　漁戸憂児／第十二齣　攝水阻舟／第十三齣　遭冤泣訴／第十四齣　金針刺蟒

朱家溍「清代宮中乱弾演出史料」に引かれる光緒年間の上演記録は、時期的に見て京劇と思われる上、四本各八齣、全

三十二齣となっているので、上記の京劇テキストであろう。[30]

光緒二十二年五月初五日、統一斎承応、『闡道除邪』二十三齣、過会。／光緒三十四年五月初一日、頤楽殿承応、頭本『闡道除邪』前八出，……頭本『闡道除邪』後八出。初四日、頤楽殿承応、頭本『闡道除邪』前八出。初五日、頤楽殿承応、頭本『闡道除邪』…（中略）…二本『闡道除邪』。初六日、三本『闡道除邪』…（中略）…四本『闡道除邪』。

（三）「広成子三進碧游宮」本

また「嘉慶二十四年賞恩檔」には、端午節に『闡道除邪』全三本を上演した記録がある。[31]

五月初二日　同楽園承応　頭本『闡道除邪』五齣「金殿試術」／初四日　同楽園承応　二本『闡道除邪』十六齣「彭沢闘法」／初五日　同楽園承応　三本『闡道除邪』十五齣「雷撃余氛」

初四日の「彭沢闘法」は、先に見た道光年間の上演記録にある二本第十六齣の齣題だが、初五日の「雷撃余氛」は八十五齣本・三十二齣本のいずれにも見あたらない。これを持つのが『闡道除邪四本題綱』昇平署抄本である。[32]

四本　第一齣悩怒通天／第二齣端陽聞信／第三齣蛙精得計／第四齣妖犯鎖拿／第五齣哭屍露目／第六齣議盗同心／第七齣諸神預召／第八齣四怪全除／第九齣玉清収陣／第十齣金殿陳情／第十一齣会審反坐／第十二齣獄底風生／第十三齣仙境同帰／第十四齣高楼験盒／第十五齣雷撃余氛／第十六齣三清祝国

「題綱」は、台詞や唱詞が無く配役を示すだけの資料だが、四本第十齣・第十一齣の齣題が八十五齣本の終わり近くの巻三第十五齣・第十六齣と同じなので、全体で四本構成のものだろう。問題は第九齣の「玉清収陣」、第十三齣の「仙境同帰」、第十六齣の「三清祝国」で、齣題から道教の最高神である三清が登場していることが分かり、また配役には『封神演義』で三清にあたる「通天教主」「元始天尊」が見え、[33]他にも「広成子」「多宝道人」「哪吒」など『封神演義』の人物が書かれているので、状況から考えて『封神演義』第七十二回から第七十八回（あるいは、それに基づく宮廷大戯『封神天榜』）の、いわゆる「広成子三進碧游宮」の場面が『混元盒』に混入されていることが推測される。

これと関連すると思われるのが、景孤血によって記録されている「兪菊笙は崑曲『闡道除邪』の内廷本をひそかに宦官

から借り出して京劇に改編したが、完成前に露見したため、仕方なく『封神演義』の「広成子三進碧遊宮」の段を入れて内廷本とは異なる内容に仕立てあげ、懲罰を免れるようにした」という逸話である。[34] 恐らくこれは、兪菊笙の上演した『混元盒』が他のテキストと異なっていたために生じた話で、実際には兪菊笙がもとにした崑弋腔にも広成子三進碧游宮の段はあり、それが『闡道除邪四本題綱』に反映されている崑弋腔テキストなのだろう。趙綺霞が所蔵するという兪菊笙本は未見だが、[35] 中央研究院歴史語言研究所所蔵『混元盒』皮黄本はこの兪菊笙版から「広成子三進碧遊宮」部分を単行させた折子戯本だと思われる。

なお兪菊笙の弟子の王瑶卿にも京劇『混元盒』八本があり、光緒二十八（一九〇二）年の福寿班での上演を皮切りに、民国十三（一九二四）年に舞台を離れるまで数度、紅蟒と琵琶仙子の役で演じている。斉如山によれば、王瑶卿本は兪菊笙本をもとに皮影戯から「蝎子精」の段を入れるなどして旦重視の内容に改編したという。[36] また梅蘭芳も琵琶仙子の役で民国四（一九一五）年七月二十五日の初演以降、何度か上演を行っているが、これは斉如山が王瑶卿本にさらに手を入れたもので、北京市芸術研究所所蔵本がこれにあたる。[37]

兪菊笙はまた、内弟でともに春台班にいた張玉奎と一緒に、『混元盒』に基づいて以下のような『五花洞』という演目も制作している。[38]

五花洞で千年の修錬を経た蜈蚣の金頭大仙、蝎の毒尾大仙、壁虎の灰身大仙、蝦蟇の金眼大仙、蛇の長身大仙の「五妖」は、天師の張傑が常に自分たちと敵対することを恨んでいた。壁虎と蝎は世間を攪乱すべく人間界に降りてゆくが、途中、弟の武松の所へ行く武大と潘金蓮に会い、戯れに二人そっくりの姿に化ける。武大と潘金蓮の本物と偽物が混じり合い、困った一同は役所に訴え出る。訴えを受けた陽穀県令は、折良く巡回に来た包公に審議を依頼する。そこに張傑が現れ、法官らを使って壁虎と蝎を調伏する。

この作品は本物と偽物が同じ歌で歌い比べをする面白さがある上、比較的短く民間での上演に適することもあって、民国期以降は端午節の演目として一般に広く行われるようになり、現在でも実際の上演を見ることができる『混元盒』由来の

唯一の演目となっている。

五、おわりに

旧稿では、はじめに大部の崑弋腔テキストが成立し、その後簡略化されたバージョンも作られたが、京劇が流行すると蒙古車王府曲本所収本が制作され、それをもとに兪菊笙本・王瑶卿本・『五花洞』などが生まれたというように、崑弋腔から京劇への交替を直線的なものと捉えていた。しかし今回、新たに参照できるようになった資料を利用することで、『混元盒』には八十五齣本・三十二齣本・「広成子三進碧遊宮」本の三系統が存在し、それらをもとにそれぞれ京劇版テキストが作られたという、やや複雑な経緯を辿っていたことが分かった。

こうした状況を生んだのは、一つには『混元盒』が節戯と大戯の両方を兼ねた演目であるという、作品の特質が関わっているものと思われる。『混元盒』の上演は、重要な年中行事である端午節の活動の一部となったため、他の大戯と違いほぼ毎年行われることになり、時代が崑弋腔から京劇に変わっても継続された上、恐らくはその時その時の条件に応じて様々に加工される必要があったのだろう。そうした状況下に作られた諸テキストは、一般の古典文献とは様相の異なる繁雑な版本問題を作り出すこととともなった。こうした点は、中元や追儺と関わる目連戯が各地で膨大な変種を生んだ状況とも類似しているといえよう。[39]

かつて清朝の演劇史は、「崑曲の没落」と「花部の勃興」という軸で語られ、[40]間に挟まれた崑弋腔宮廷演劇はあまり評価されてこなかったきらいがある。これは、（一）レーゼドラマ重視の観点から文学的価値が低いとされたこと、（二）政治的理由から支配階層の反動的な演劇と断罪されたこと、（三）崑曲や京劇と違って実演を見ることができないため関心を持たれなかったこと、（四）後の京劇の発展に寄与した点に言及されることはあっても、関連資料の閲覧が難しいため詳細を検討できなかったこと、などが理由として挙げられる。しかし近年、研究環境の変化や関連資料の出版などもあって検討が進み、演劇史における位置づけも見直しが行われている。[41]そうした中で、本稿で検討した『混元盒』の展開は、清朝宮廷演劇

の演目を考える上で一つのモデルケースとなるであろう。

注

1 中華書局歴代史料筆記叢刊本、一九八〇年。原文は紙幅の都合で省略した。

2 目連戯はもともと中元節の際に民間で弋陽腔系諸腔によって上演されたが、次第に肥大化して『西遊記』や『封神演義』など明代の章回小説を題材とした大部の演目を吸収し、さらにこれが宮中に移植されて「大戯」となった。拙稿「宮廷大戯『封神天榜』をめぐって」（『中国古典小説研究』第八号、汲古書院、二〇〇三年、九十八―一一四頁）を参照。

3 牛川海『乾隆時期劇場活動之研究』華岡出版有限公司、一九七七年。

4 拙稿「混元盒物語の成立と展開」、『近代中国都市芸能に関する基本的研究』平成九―十一年度科学研究費基盤研究（C）成果報告論文集、二〇〇一年、一〇六―一三二頁、および拙稿「『混元盒』与民間文学」、『二〇〇一年両岸民間文学学術研討会論文集』、国立花蓮師範学院民間文学研究所、二〇〇一年、一三九―一六二頁。

5 なお本稿は平成二十二年十一月二十一日にフォーレスト本郷会議室で開催された「清朝宮廷演劇文化の研究」研究会で行った口頭発表「宮廷演劇『混元盒』の成立と上演」に基づく。また本稿で参照した『混元盒』首都図書館蔵本については同研究会の磯部彰氏より複写の提供を受けた。ここに記して感謝の意を表したい。

6 書目文献出版社、一九九四年。原文は紙幅の都合で省略した。

7 拙稿「『封神演義』通天教主考」、『道教と共生思想』（大河書房、二〇〇九年、一七六―一九八頁）参照。

8 『正統道蔵』洞真部記伝類、S. N. 二九六。

9 原型は六朝時代の初期天師道文献である『女青鬼律』に遡り、明・王世貞『列仙全伝』や明・無名氏『三教源流搜神大全』などにも見えるほか、後の五福大帝信仰にも繋がる。宋怡明編『明清福建五帝信仰資料彙編』（香港科技大學華南研究中心、二〇〇六年）参照。

10 櫻井幸江「包公説話の一側面――張天師伝説との関わり」、『お茶の水女子大学中国文学会報』第十六号、一九九七年、四七―六二頁。

11 なお、宋代以来の張天師が張道陵の子孫かどうかは議論がある。二階堂善弘『明清期における武神と神仙の発展』（関西大学出版部、二〇〇九年）参照。

12 『万暦続道蔵』所収『漢天師世家』、S. N. 一四六三。

13 明・沈榜『宛署雑記』巻十七、北京出版社、一九六一年。

14 五月。初一日起至十三日止，宮眷内臣穿五毒艾虎補子蟒衣，門兩旁安菖蒲、艾盆，門上懸掛吊屏，上畫天師或仙子、仙女執劍降五毒故事，如年節之門神焉。懸一月方撤也。（北京古籍出版社、一九九四年）

15 台北・国立歴史博物館所蔵「天師鎮宅符」（『道教文物』国立歴史博物館、一九九九年、一九八頁）がこれにあたる。

16 『古本小説集成』（上海古籍出版社、一九九四年）所収浙江図書館蔵道光十二年富経堂刊本。

17 『古典戯曲存目彙考』上海古籍出版社、中巻一二五四頁。

18 故宮博物院（編）『故宮珍本叢刊』海南出版社、二〇〇一年、第六六〇冊。また牛川海『乾隆時期劇場活動之研究』にも異本が収録される。

19 『月令承応』については有澤晶子『中国伝統演劇様式の研究』（研文出版、二〇〇六年）参照。

20 四月二十一日：上交下『混元盒』一本至三本，着内頭學、内二學寫串關，上覽分派。五月初五日：蓮慶、來喜傳旨，『混元盒』鼓板當起更，纔是打了上場鑼鼓，錯了。蓮慶、來喜親看將高吉順重責三十板，永遠不許他迎請見面。五月初九日：上派角色『混元盒』。第一齣 玉皇：董玉、大劉進喜；金星：王麟祥、任玉；金花：彭祿壽、曹進喜。第二齣 天師：張良貴、黒子。第三齣 呂洞賓：孫魁、魏得祿；陶謙：大劉得、黄元。第四齣、五齣 陸炳：陸順。第六齣 嘉靖：李增壽、小劉進喜。（朱家溍・丁汝芹『清代内廷演劇始末考』中国書店、二〇〇七年）

21 北京古籍出版社、一九九一年。清蒙古車王府蔵曲本については拙稿「車王府曲本所収皮影戯考――北京東西両派との関係を中心に」、『中国都市芸能研究』第四輯、好文出版、二〇〇五年、二一―三二頁を参照。

22 周明泰（輯）『清昇平署存檔事例漫抄』（文海出版社、一九七一年）所収。なお京劇では一般的に齣（出）という表現は用いられないが、ここは崑曲や崑弋腔の表記を踏襲したものだろう。

23 『中国通俗小説書目』人民文学出版社、一九五七年、二〇五頁。

24 拙稿「邵陽木偶戯の形成と梆子腔」、『近現代華北地域における伝統芸能文化の総合的研究』平成17-19年度科学研究費補助金基盤研究(B)研究成果報告論文集、二〇〇八年、二八―三五頁。

25 『故宮珍本叢刊』、第六六八冊。

26 『故宮珍本叢刊』、第六六八冊。

27 『清昇平署存档事例漫抄』所収。

28 『燕影劇』オット・ハラソヴィッツ、一九一五年所収。拙稿「『燕影劇』の編集をめぐって――ドイツ・シノロジストによる北京皮影戯の発見」、『中国都市芸能研究』第三輯、好文出版、二〇〇四年、二一―三二頁参照。

29 『故宮珍本叢刊』、第六九三冊。

30 『戯曲研究』第十三輯・第十四輯、文化美術出版社、一九八四年・一九八五年。

31 『清昇平署存档事例漫抄』所収。

32 『故宮珍本叢刊』、第六九四冊。

33 拙稿「『封神演義』通天教主考」参照。

34 景孤血「由四大徽班時代開始到解放前的京劇編演新戯概況」、『京劇談往録』(北京出版社、一九八五年)所収。

35 『京劇劇目辞典』、中国戯劇出版社、一九八九年、一一七八頁。

36 斉如山「戯界小掌故」、『京劇談往録三編』(北京出版社、一九九〇年)所収。

37 『京劇伝統劇本匯編続編　混元盒』北京出版集団公司・北京出版社、二〇一二年。

38 『戯考大全』(上海書店、一九九〇年)第二巻八三五―八四一頁。

39 この方面の最新の成果としては田仲一成『中国鎮魂演劇研究』(東京大学出版会、二〇一六年)が挙げられる。

40 例えば青木正児『支那近世戯曲史』(弘文堂書房、一九三八年)など。

41 磯部彰(編)『清朝宮廷演劇文化の研究』、勉誠出版、二〇一四年。